

『創価教育学体系』 発刊80周年を迎えて

神 立 孝 一

本年は、『創価教育学体系』が発刊された昭和5年11月18日から、80周年の佳節を迎える。発刊された昭和5年、すなわち1930年前後の日本は、歴史年表を見ると、様々な出来事が起こっていた時期でもある。1929年には、いわゆる「張作霖爆殺事件」が起こり、31年の「満州事変」勃発の兆しが見え始めていた。経済的にも29年には、周知の通り世界大恐慌となり、社会は深刻な状況になりつつあった。30年の1月には、「金解禁」が実施され、混迷はますます深まり、同月のロンドン海軍軍縮会議を経て、軍部の台頭が明らかになっていく。それ以前の「大正デモクラシー」の香りが、徐々に軍靴の音でかき消されていく段階であったといえよう。

こうした社会情勢のなかで、牧口常三郎の念願であった『創価教育学体系』第1巻が、戸田城外（当時）の協力のもと発刊されたのである。この第1巻は、翌々年の「五・一五事件」の際に軍部の手によって射殺された、犬養毅の頭書が掲げられている。それは漢文の白文を墨書したもので、次のように書かれている。

「天下無不可教之人亦無可以不教之人 犬養毅題（朱印）」

（天下に教う可からざるの人無く、亦以て教えざる可きの人無し）

その意味は、「世の中に教えられない人はいないし、また、教えなくてもよい人はいない」と読める（『創価学会三代会長年譜 上巻』創価学会、2003年、109頁）。

犬養は『創価教育学体系』の刊行に当たって結成された、「創価教育学支援会」にもその名を連ねている。その犬養が、牧口の教育学をどのように理解していたのかを、集約した文言のように思える。これに続き、社会学者の田辺寿利が「創価教育学の学問的及び実際の価値」、新渡戸稲造が「我が国将来の教育と創価教育学」、柳田國男が「創価教育学の基礎としての農村研究」とそれぞれ題する序文を掲載している。続いて牧口自身が、

「古代の傭兵の様に、己が領分である教育社会にも一顧されない様な旧来の教育学を棄て、新しい教育学を実証的、科学的に蘇生せしめて、実際の教育生活に密接なる関係を保たせようとしたのがこの創価教育学である」

で始まる「緒言」を載せている。そして、「第一編 教育学組織論」「第二編 教育目的論」の二編が収められている。本編分250頁を含め、約300頁ほどの書物であった。

「創価教育学とは人生の目的たる価値を創造し得る人材を養成する方法の知識体系を意味する」という文言で、第1章「緒論」が書き出され、その後1931年に第2巻、32年に第3巻、34年に第4巻が刊行されていく。この第1巻の刊行は、まさに人間の本質に迫る、真の教育の黎明を告げるものであった。

それから80年。今、創価教育学は本学の創立者である池田大作先生によって受け継がれ、日々実践されている。この佳節に当たり、われわれは再度『創価教育学体系』の精神と、その方法を深めていかなければならない。そのための研究であり、研究所でありたいと思う。そして、新たなスタートの年としていくことを、念願するものである。